

公益財団法人 海外子女教育振興財団

AG5 事務局 宛

2021 年度 AG5 報告書

1. 報告者	
(1) 学校名	青島日本人学校
(2) 氏名	岩本梨花
2. 実施体制	
日本語指導担当教員の役割を組織上明確にし、指導教員の人数を増やして個別の日本語指導や在籍学級での支援ができるように体制を整えた。また、AG5 推進委員は、学校全体で「多文化共生の学校づくり」に取り組むために必要な情報を校内研修会等で発信し、授業実践を行った。研究部と協働し、多文化共生の視点を取り入れた研究授業・研究協議を行った。	
3. テーマ	
日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発 「多文化共生の学校づくり～青島日本人学校の実践～」	
4. 目的と概要	
本校は、約半数がさまざまな国のルーツを持つ児童生徒であることから、もともと多様性のある環境にある。しかし、児童生徒の傾向として、だんだん学年が上がるにつれて文化的な背景を隠すような場面も見られるため、児童生徒が自分の背景を包み隠さず出せるような関係づくりが大切だと感じている。そこで、背景にある文化や習慣にも目を向け、お互いが尊重し合える関係を構築し、学校生活における共通の課題に対して「日本語」を媒介として対等に話し合っていくためにも、「日本語力の向上」と「多文化共生の学校づくり」の両軸を意識して日々の指導にあたった。	
5. 今年度実施した取組み(※研究会や出張等は日程も含め記載してください)	
(1) 日本語指導 ①課外の日本語教室:小1(毎週水曜日)、小2(毎週金曜日)、小3(毎週月曜日) ②個別の日本語指導:小6、中1、中2、中3(中国語や学活、部活動の時間に実施) ③在籍級での日本語指導 (2) 多文化共生の視点を取り入れた授業実践 ※AG5 ウェブ掲載用資料の作成 (3) 汎用性のある日本語指導プログラム動画作成 ※AG5 ウェブ掲載 (4) AG5テーマ2マニラ・大連・青島合同情報交換会・研究会への参加 5月22日(土)第1回オンライン情報交換会(マニラ日本人学校主催) 6月19日(土)第2回オンライン情報交換会(大連日本人学校主催) 7月17日(土)第3回オンライン情報交換会(青島日本人学校主催) 10月23日(土)せんせいカフェ 11月 7日(土)合同研究会(マニラ日本人学校主催)	

6. 今年度の成果・効果（※詳細に記載し、成果物があれば添付してください）

＜多文化共生の学校づくりに向けて＞

(A) 多様な学びを支える日本語指導(対象を拡大して実施)

成果

- ・課外の日本語教室（小1、小2、小3）：学年ごとに週1回、放課後に実施。
- ・個別の日本語指導（小6、中1、中2、中3）：週1回、個別の取り出し指導を実施。
- ・在籍学級での日本語指導：在籍学級担任と日本語指導担当とが連携して指導を実施。

※ICT機器（iPad など）を活用し、効果的に指導を行うことができた。

全学年・全授業の中で、iPad を理解支援・表現支援のツールとして活用した。

11月より小5～中3までは、一人1台iPad貸し出しを実施。家庭への持ち帰りも可能とした。家庭学習の中で、録音機能を活用した音読指導や発表ツールを活用して資料作成を行うなど、効果的に学習を進めることができた。また、児童生徒の視力低下を防ぐ、iPad 自体の破損を防ぐため、ブルーライト保護フィルム・iPad ケースを購入し、使用した。今年度は、1月になってからも編入学性が相次いだため、iPad ケースを追加で購入し、全ての児童生徒が安心して使用できるようにした。指導した内容や作成した資料などは、大容量記憶媒体に保存し、いつでも閲覧したり、利用したりできるようにしている。

課題

○学年があがるにつれて、取り出し指導を行う時間や内容を精選する必要がある。

各教科の学習も、より専門的になってくるため、専門的な知識がある担当教員を配置できるとよい。

(B) 多文化共生の視点を取り入れた授業実践

成果

○様々な教科で多文化共生の視点を取り入れた授業実践を行い、授業後、研究協議を行うことで、教職員の研鑽を高めるとともに、児童生徒のよりよい学びについて考えることができた。研究授業で作成した指導案は、AG5 ウェブサイトへの掲載資料として提出した。

課題

○教職員間で多文化共生の視点を共有することが足りていない部分があった。校内研修を通して、目指す子どもの姿や授業の在り方を共有する時間を設ける必要があった。

(C) 実態把握のためのアンケートの実施

成果

○年度初めと年度末に児童生徒の実態把握のため、アンケートを実施。

＜アンケート結果からの考察（一部）＞

- ・年度当初と比べて、学校生活や授業の中で日本語の意味がわからなくて困ったことがある児童生徒の割合が減っている。取り組んできた日本語指導の成果として、児童生徒の日本語力の向上が原因として考えられる。

- ・自分にはよいところがあると思うという質問に対しては、97%の児童生徒が肯定的な回答をしている。多文化共生の視点を取り入れた学級経営案を作成し、実践してきたことが児童生徒のよりよい人間関係を作り、自己肯定感を高めることに繋がったと考える。
- ・ほとんどの項目で年度当初よりも肯定的な回答が多くなっている。

課題

- アンケートの実施・集計をもっと簡略化できるよう、ICT 機器を活用して実施することを検討していきたい。

(D) 学級経営案作成

成果

- 年度当初に作成した学級経営案をもとに、各担任が学級経営を行うことができた。また、各担任が随時振り返りを行うとともに、学部会などで情報を共有することで生活指導に役立てることができた。

課題

- 学校全体で学級経営についての成果と課題を共有する場が作れると良かった。

(E) ネットワークを利用した研修会の実施

成果

- ・日本の学校とのオンライン交流会（小1、小5、小6、中学部）
iPad を活用して、自己紹介を行ったり、中国や青島・日本のことを紹介し合う活動を行うことで、お互いの国や文化についてより詳しく知ることができた。
- ・現地校とのオンライン交流（小5、小6）
学習した中国語を活用して、お互いのことを紹介したり質問したりすることができた。
- ・ようこそ先輩（卒業生との交流）
- ・オンライン企業訪問（中学部）
キャリア教育の一環として行い、進路や高校進学について考える機会となった。
- ・情報交換会・合同研究会への参加
他校の実践内容や指導の様子を知ることができ、研究を深めることができた。また、意見交換ででた意見や質問から、これまでの実践を振り返ったり、効果的な指導方法についても知ったりすることができた。

課題

- 学年の発達段階に応じて、交流の目的や教育効果を考えていく必要がある。今後は、何のために交流するのか、子どもたちにどんな力をつけたいのかを具体的に思い描き、計画的に交流を行っていきたい。

7. まとめ

多文化社会の中で生きる力を育成するために、様々な取組を行ってきた。全校で取り組むために、誰が何を担当するのかを明確にし、提案することができた。その成果が年度末のアンケートに表れていると考える。AG5 の取組として3年間行ってきたが、来年度以降

も継続して行うことができるよう、作成した資料・指導記録などをきちんと保存し引き継いでいくことで次年度以降のさらなる取組の深化に繋がると考えている。

8. 次年度の計画

今年度行ってきた取組を継続して実施するとともに、内容の深化を図る。次年度は、オンライン交流会がもっと計画的に行えるよう内容の精選を行っていく必要がある。また、日本語指導については、指導教員を増やし、より効果的に指導に当たることができるよう計画していく。

9. 所感

多文化共生の学校づくりを目指すことで、全ての児童生徒の学びを深めたり、広げたりすることに取り組んできた。そして、それは、バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成に繋がり、これからの国際社会で活躍できる人材の育成に繋がっている。日本語指導が必要な子どもたちも、そうでない子どもたちも共に生き生きと活躍できる学校づくりを目指し今後も実践を続けていきたい。